令和７年度学校評価報告書　【国立市立国立第七小学校】

学校教育目標	期間中的目標	担当校務分掌	年間経営目標	具体的な方策	評価指標	達成状況 中間評価	達成状況 最終評価	中間報告 成果と課題	最終報告 成果と課題	学校関係者評価
かしこく	学びの楽しさを感じ、主体的・積極的に学習しようとする児童の育成	校内研究	①学びの楽しさを感じられる児童を育成する。	・導入や発問の工夫、ねらいに沿った学習課題の設定を行い、児童が「分かった」「できた」と思える授業を行う。 ・基礎基本の定着のために授業の中で復習・反復学習に取り組む。	学校生活アンケートで、児童が「できた」「分かった」と実感できた児童が A　90%以上 B　80%以上90%未満 C　80%未満	A	A	教員は、基礎基本を定着させるための時間を日々授業に取り入れ、「分かった」「できた」と思える授業研究に励んでいる。今後も課題設定を工夫をし、ねらいに沿った振り返りを行っていくことで、学びの楽しさをより多くの児童に実感させていく。一方で、児童が「できた」「分かった」という感覚がどのような根拠に基づいているのかを見極めていく必要もある。	教員の授業改善に対する意識が78%から90%へ上昇し、児童の肯定感も90%と高い水準を維持することができた。今後は、「分かった」「できた」という実感が「正解」という一時的なものなのか、論理的思考等の根拠に基づいたものなのかを見極める必要がある。ねらいに沿った振り返りを徹底し、学びの質を深めることで、より多くの児童に学びの楽しさを実感させていく。	全教職員が授業改善に取り組み、児童の実態を大切に考えながら、日々指導している。個別最適な学びと協働的な学びをどのように取り入れていくのかを教科や単元によって考えていることや全教職員の研究を通した学びが結果として表れている。児童の実態に合わせた授業を行っていくためには、どのように課題を設定していくのかという視点を大切にして、今後も授業改善に取り組んでほしい。
		校内研究	②個別最適な学びの環境を整備する。	日々の授業実践を教員自身で振り返り、校内研究の学びを活かしながら授業改善に取り組む。	校内研究において、自己の授業の振り返り授業改善につなげた教員が A　90%以上 B　80%以上90%未満 C　80%未満	A	A	日々の授業実践を振り返ることができている教員が78%だった。校内研究のアンケートでも児童が自分の成長に気付けたと感じている教員は70%程度だった。校内研究の視点を「課題設定の工夫」と「振り返りの充実」に焦点化していく。そして、毎月の校内研究分科会の際に、輪番で実践を報告をするなど授業改善に向けた教員同士の対話の時間を増やしていく。	教員の自己評価は4%減少したが、校内研究において「課題設定の工夫」と「振り返りの充実」への焦点化が不十分であったこと、単元の内容によっては個別最適な学びを実践する難しさがあることが分かった。今後は、研究の視点をさらに明確にしたり、単元特性に応じた具体的な指導法を共有したりすることで、実践の質の底上げを図っていく。	
		校内研究	③協働的な学びの場を充実させる。	授業において、自力解決や学び合いの時間を設定し、児童が自分の考えを整理したり、伝えたりする楽しさを味わわせる。	友達と話し合ったり、自分の考えを伝え合ったりすることが楽しいと感じた児童が A　90%以上 B　80%以上90%未満 C　80%未満	B	B	自力解決や学び合いの時間を設定している教員は多いが、授業によってどのように設定したらよいのかという難しさを感じている。後期は、教員が自身の授業を振り返り一人一枚の実践報告書を作成していく。校内研究における学びの場を大切にしながら、児童同士の交流を充実させていけるように研究を進めていく。	実践報告書の作成等を通じて授業改善を推進した結果、教員の意識は約10%向上したが、児童のアンケートでは、肯定的な回答が3%減少した。授業改善につなげるためには、児童の実態に即した実践内容に繋げることの重要性が分かった。今後は児童の姿を的確に捉え、より実態に基づいた授業改善に励んでいく。	
やさしく	主体性をもって「やさしく」行動する児童の育成	生活指導	④自分らしくいられる環境をつくる。	・月目標の振り返りや教員の模範的行動等を通して、挨拶のよさやマナー・ルールの大切さを児童が実感できる指導を行う。 ・優しい言葉遣いで相手と関わる児童を価値付け、居心地のよい居場所づくりを行う。	自分から挨拶をすることができた児童が A　90%以上 B　80%以上90%未満 C　80%未満	A	B	「とてもしている」と答えた児童が48.5%、「まあまあしている」と答えた児童が43.9%であることから、挨拶などのマナーやルールに関して大切に考えている児童が多い。ただ、挨拶に関しては、自分から挨拶をするということにおいて課題とする声が校内で度々挙げられている。「とてもしている」と答える児童が増えるように、教員が模範的行動を示していく。	全体では、87.2%という結果であったが、高学年は90%が肯定的な回答になった。その理由として、児童会委員を中心に挨拶運動を実践するなど、自分から挨拶をする大切さを、学校全体の問題として考えた高学年の主体的な行動があった。挨拶などのマナーやルールが、なぜ大切なのかという視点で、繰り返し指導し、学校全体で意識を高めていく。	朝の登校では、挨拶ができている児童も多いように見られる。もう少し元気があるといいので、来年度は「げんきよく」という項目に挨拶をするという内容が入っていてもいいのではないか。また、優しい言葉遣いよりもきれいな日本語を使うという指導にしてみてはどうか。相手のことを考えた言葉遣いができることも「やさしさ」には大切だと考える。
		生活指導	⑤交流活動を通して、多様性を受け入れる心を育てる。	Q-U結果の活用やグループエンカウンターを通して、よりよい人間関係を築く力を育てる。	グループエンカウンターを学期に1回以上行った教員が A　90%以上 B　80%以上90%未満 C　80%未満	C	C	学校生活満足度調査（Q-U）の活用を図るために、全教員を対象に研修を行っている。学級担任は、児童の実態を読み取り、対策に向けて具体的な実践を行っている。専科や特別支援（はばたき・きこえとことば）担当教員においても、Q-Uの結果を活用したり、ミニエクササイズ等を取り入れたりして、よりよい人間関係を築く力を学校全体で育てていく。	学級担任はアセスメントシート（実態把握表）を作成し、具体的な事例を出してより実践に近い活用方法を研修した。その結果、できたと振り返った教員は15%増えた。アセスメントシートを共有したり、人間関係を築くためのエクササイズ等を専科や特別支援の授業等にも取り入れたりしながら、学校全体で児童理解に取り組んでいく。	
		特別活動	⑥学級活動や学校行事に主体的に関わり、振り返りながら自分の成長につなげる児童を育てる。	主体的に取り組むことができるような学級活動や学校行事を行い、振り返りを通して自己の成長を感じられるようにする。	すすんで学校行事や学級活動に取り組むことができたと感じる児童が A　90%以上 B　80%以上90%未満 C　80%未満	B	B	児童が主体的な取組ができたと思えるような学級活動の設定や振り返りがあまりできなかった学級もあることが分かった。大きな行事だけでなく、普段の活動も自己の成長につながっていることを実感させられるようにしていく。また、学校全体で児童の活動や振り返りを価値付けていけるようにする。	後期は、運動会や文化的行事への取組において高まった学年が見られ、肯定的な評価が3%あがった。しかし、肯定的な評価が低くなっている学年もあるので、児童が自分の成長を実感できるようにするために「一人一人が自分のめあてをもって参加する」ことを価値付け、振り返ることを大切にしていく。	文化的行事では、児童鑑賞日と保護者鑑賞日によって児童の表情に違いがあった。見せる相手によって児童の気持ちは変わる。教員も、相手意識をもたせて一人一人のめあてを大切にしていくという指導が児童の成長につながっていく。
げんきよく	粘り強く取り組む児童の育成	体育	⑦体幹を鍛え、体力の向上を図る。	・元気アップタイムや短縄月間の取組を充実させ、日々の体育学習や運動する機会に繋げていく。	休み時間や体育の時間にすすんで体を動かしていると答えた児童が A　90%以上 B　80%以上90%未満 C　80%未満	C	C	前期では、天候により運動する機会を意図的に設定することができなかったことが原因として考えられる。後期から、休み時間に体育館を使用できるように割り当て、運動量を確保できるようにした。来年度は、4月から体育館等を使用できるようにしていく。また、運動の楽しさを感じられるように運動遊びを授業に取り入れていく。	10月から休み時間の体育館の使用可能学級を割り当てた。また、短縄週間やマラソンなどにも取り組み、休み時間に体を動かす児童が増えた。学校全体で取り組むことで、教員の意識が、前期と比べ約35%向上させることができた。しかし、取組週間が終わると休み時間に体を動かす児童が減少している面もあるため、引き続き学級でも外遊びを奨励していく。	取組期間以外にも継続できるようにカードや表彰の場を設定しているが、自分から外に出るという意識が低い。一方で、自分の得意を伸ばすなど、個性の尊重も大切だと思う。休み時間を元気よく外で過ごすだけではなく、体力テストや体育の学習において「元気よく」につながる取組があってもいい。また、七小の児童の実態を理解するためにも、学校運営協議会で体力テストの結果を知ることができるといい。
		体育	⑧体力や健康への興味関心を高める。	体力テストの結果を分析し、苦手な種目を克服できるような運動や発達に合わせた運動を指導し、体を動かす楽しさを味わわせる。	体育の授業で体を動かく楽しさを味わわせたり、健康に過ごすための指導を行ったりした教員が A　90%以上 B　80%以上90%未満 C　80%未満	C	C	前年度の体力テストの結果を活用し、低学年では授業時間に課題改善に向けた運動を取り入れることができた。しかし、高学年は指導内容が多く、授業時間の中で活動を取り入れることが難しかった。後期は単元に合った運動遊びなどを取り入れていけるように、計画的に取り組んだり、短時間でも意図的に活動を設定するようにしたりする。	各学年、授業の時間などに瞬発運動や持久走、鬼遊びなどを取り入れ、体力向上を目的とした運動に取り組んだことで、教員の肯定的な回答が約30%向上した。年間指導計画を見直すと共に、体育推進委員が中心となって、誰でも簡単に取り組むことができるような活動例などを定期的に示し、全校で取り組んでいく意識を高めていく。	
		特別支援	⑨児童が粘り強く取り組む力を育てる。	・ヘルプスキルを高められるような指導を繰り返し行い、児童自身が、心を安定させて過ごすための手段や自分で乗り越えようとする力を身に付けられるようにする。 ・学期毎に個にあった指導や支援方法に関する研修を行い、組織的な支援体制の充実を図る。	友達と助け合ったり協力したりしながら、諦めずに取り組んだ児童が A　90%以上 B　80%以上90%未満 C　80%未満	A	A	児童が主体的に取り組むことができる授業や教材の工夫を取り入れることができていたからこそ児童が粘り強く取り組む力を育てることができたと考える。教員に対しては、援助要請を出すことができているので今後は友達にも援助要請が出せるようにする。前期は、はばたき、きこえとことばの教室共に特別支援のOJTを行ったので後期も取り組んでいく。	児童が興味関心をもてる教材を授業で活用したことで、主体的な学習につながった。また、話合い活動では、教材を工夫したことで目標を達成しようと自分の意見伝えたり、相手の意見を聞いたりするなど、粘り強く取り組む力を育むことができた。友達に援助要請する姿も見られ、互いに助け合うこともできた。来年度も今年度のようなOJTを継続して実施していく。	一人一人がたくさんの経験をして、自分のめあてを達成し、学校が自分に自信をつけられる場となってほしい。失敗しても、負けてもいいという風土をぜひ学校で創ってほしい。